令和７年６月２日

令和７年度　ズッキーニ　技術情報 No. 2

大船渡農業改良普及センター
電話：0192-27-9918
FAX：0192-27-9936

① 果実を守るためにわき芽かきを行いましょう。

② 生育段階に合った草勢管理を心掛けましょう。

③ 梅雨時期に備えて、定期的な病害虫防除を実施しましょう。

1　今後の栽培管理

（1）わき芽かき

定植後、１ヵ月程度で子葉の付け根からわき芽が発生し、放置すると奇形果が増えたり果実を傷つけたりするので、**5～10cm くらい伸びたら早期に摘除**します。一度わき芽かきをしたら、その後再び発生するわき芽は、茎折れの対策となりますので、放置しても構いません。

わき芽が発生しない場合は草勢が弱いと考えられるので追肥します。

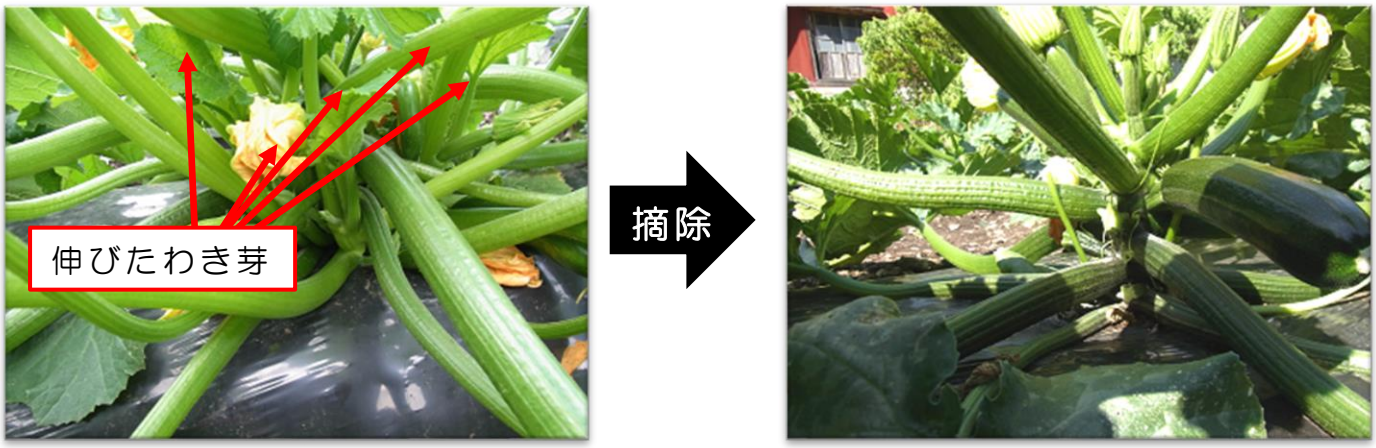

図１　わき芽かきの仕方

（2）摘果

開花初期は着果負担を軽くし、根を張らせて草勢を維持することで、後半の収量を確保します。

低温期には雄花より雌花が先に開花するため、初期に着生する果実は授粉ができず奇形果（流れ果、先細り等）になりやすいです。最初の２～３番果までは早めに摘果しましょう。

（3）追肥

定植 30 日後頃から開始し、**2 週間おきに窒素成分で 3 kg/10a** を目安に施用します。（野菜追肥 S535 の場合、20kg/10a）

果実の尻太りや蕾の曲がりは草勢低下の合図です。草勢が低下する前に追肥をしましょう。

（4）授粉

早い作型では、開花時期が低温で蜂が飛ばないので、うまく着果しない場合があります。また、夏の高温（25℃以上）だと、花粉の生成量が減少し、不稔になることが多いです。その場合は、人工授粉やホルモン処理を行うことで、奇形果の発生を抑えられます。

図２　雄花の様子

図３　着果不良の果実

（5）摘葉

古くなり黄色くなった葉や果実を覆っている葉は、摘葉します。摘葉時は、**葉柄を残し、葉のみ摘除することによって株の倒伏や腐敗を防止**することができます。

葉柄が上向きに伸びた葉は、雨水が入りやすく、病害発生の原因となるため、摘葉は控えます。

図４　摘葉の仕方

2　今後注意したい病害虫

（1）アブラムシ類

若葉の裏側、蕾、花に発生し、吸汁加害します。**ウイルス病は、アブラムシ類によって媒介**され、生長点付近の若葉が黄色と緑の鮮やかなモザイク症状を呈します。

防除暦を参考にして、**生育初期から防除**を実施しましょう。また、ウイルス病の発病株は、直ちに除去、処分して、他株への感染拡大を防ぎましょう。

図５　葉裏に寄生したアブラムシ

図６　ウイルス病の罹病株

（2）ウリハムシ

自分の体を中心にして円を描くように葉を食害します。

図７　ウリハムシの成虫

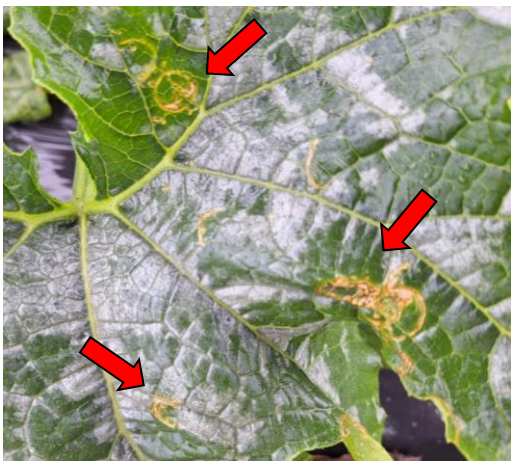

図８　ウリハムシによる葉への食害

（3）軟腐細菌病（腐敗）

主茎や果実が軟化腐敗し、腐敗した部分に白い菌泥が付着して悪臭を放ちます。

病原細菌は、**土壌中に存在し、高温多湿条件で増殖**します。雨によってほ場に広がり、傷口や害虫の食害痕から植物体に侵入し、被害が発生します。

梅雨前の定期的な防除の徹底と圃場排水・草勢維持に努めましょう。また、**罹病株は速やかに抜き取り、ほ場外へ持ち出し処分**しましょう。

図９　軟腐細菌病により腐敗した罹病株

（4）うどんこ病

最初は下葉に白い粉をまぶしたようなカビが発生し、のちに上位葉や茎にもみられるようになります。

高温乾燥や草勢低下によって発生しやすいので、草勢の維持に努めましょう。

図 10　うどんこ病の病斑

★いわてアグリベンチャーネットメールサービス会員募集中

農作物技術情報や農村地域の情報を幅広く提供する岩手県公式サイト「いわてアグリベンチャーネット」のメール会員を募集します。

登録方法は以下のホームページをご覧ください。

URL: https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/mailinglist.html

★4 月 15 日～6 月 15 日は春の農作業安全月間

農業機械の基本操作を守り、無理のないスケジュールで作業を行いましょう。

令和７年度岩手県農作業安全スローガン

「忘れずに！点検・確認・安全管理　無事故で終える収穫作業」

★6 月 1 日～8 月 31 日は農薬危害防止運動実施中

使った農薬は使用履歴を記帳し、適正使用を徹底しましょう！

★農作業中の熱中症を予防しましょう！

夏に向けて、農作業中に熱中症になる人が増えてきます。

４つのポイントを意識して、適切に予防しましょう。

①暑さを避ける　　②こまめな球形と水分補給

③単独作業は避ける　④熱中症対策アイテムの活用